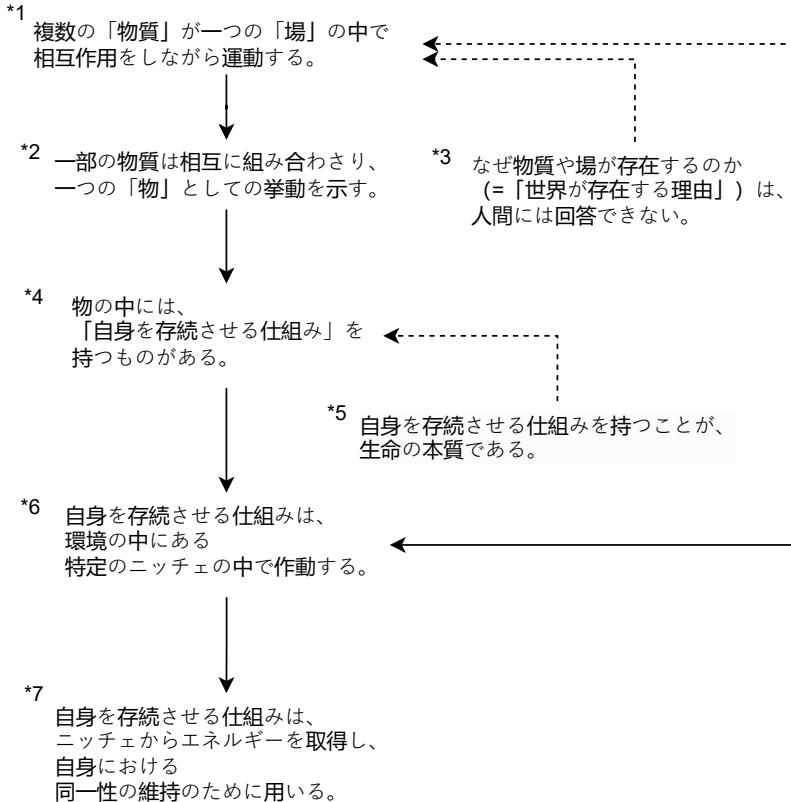


図 1：生命と環境



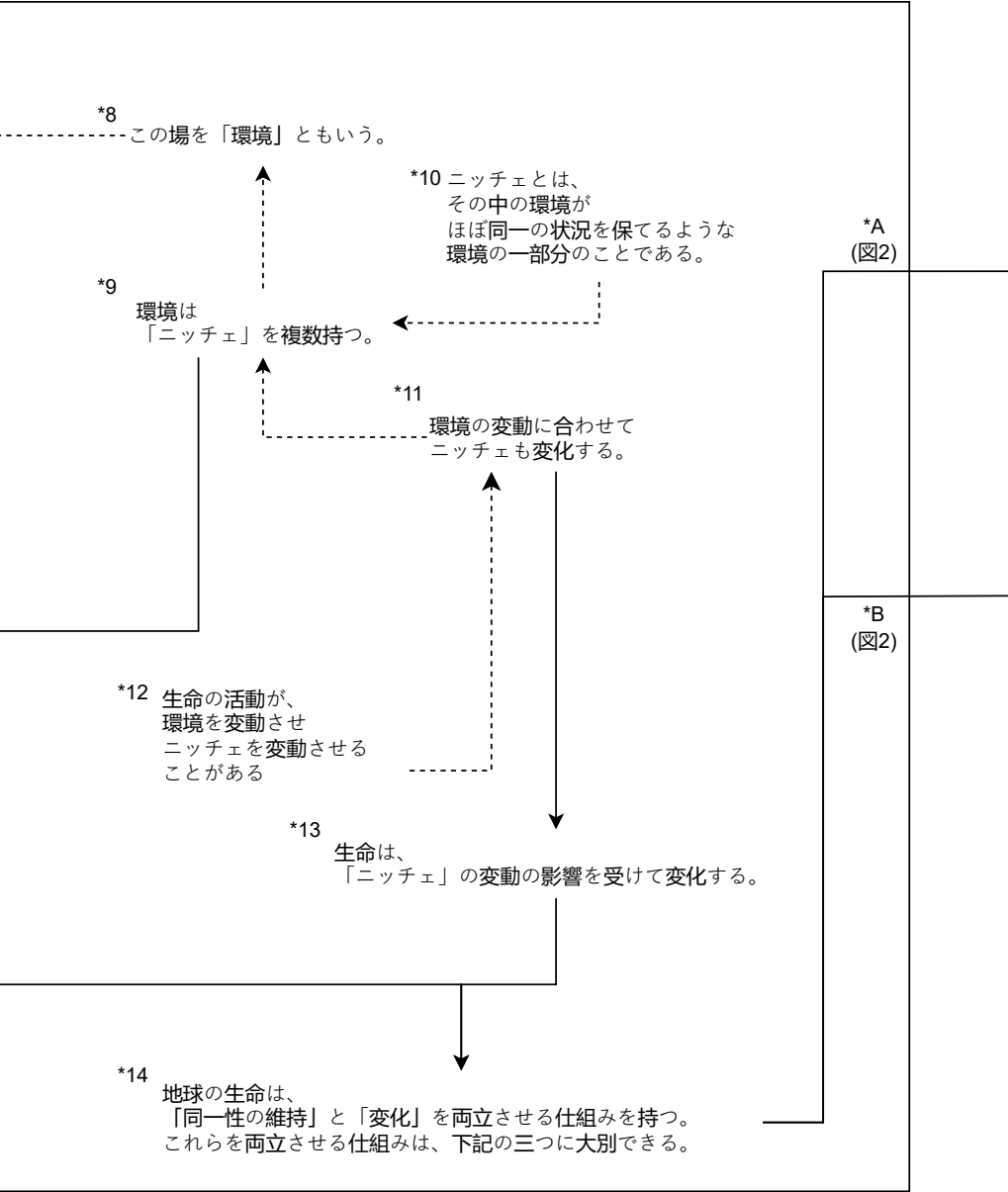
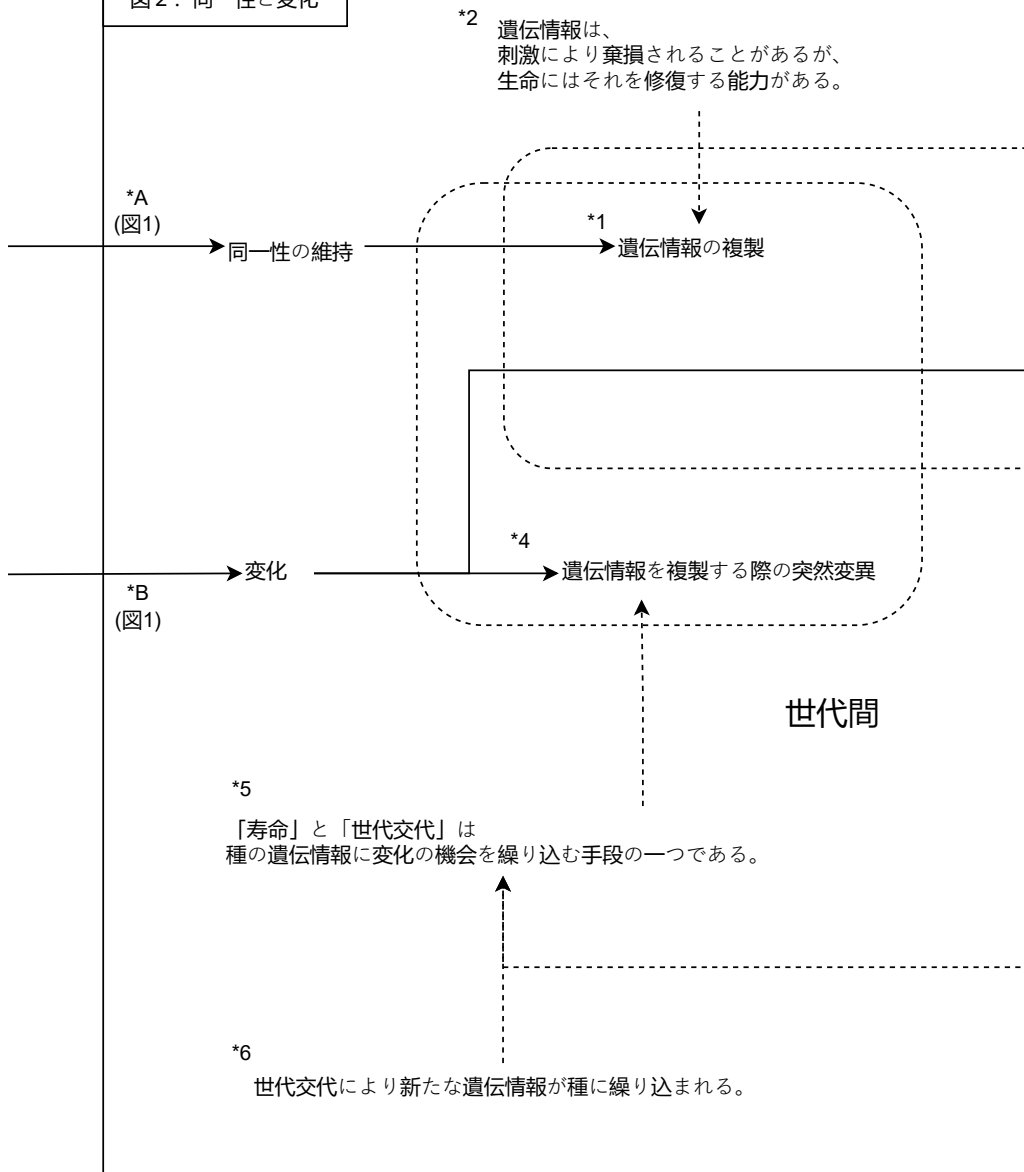


図2：同一性と変化



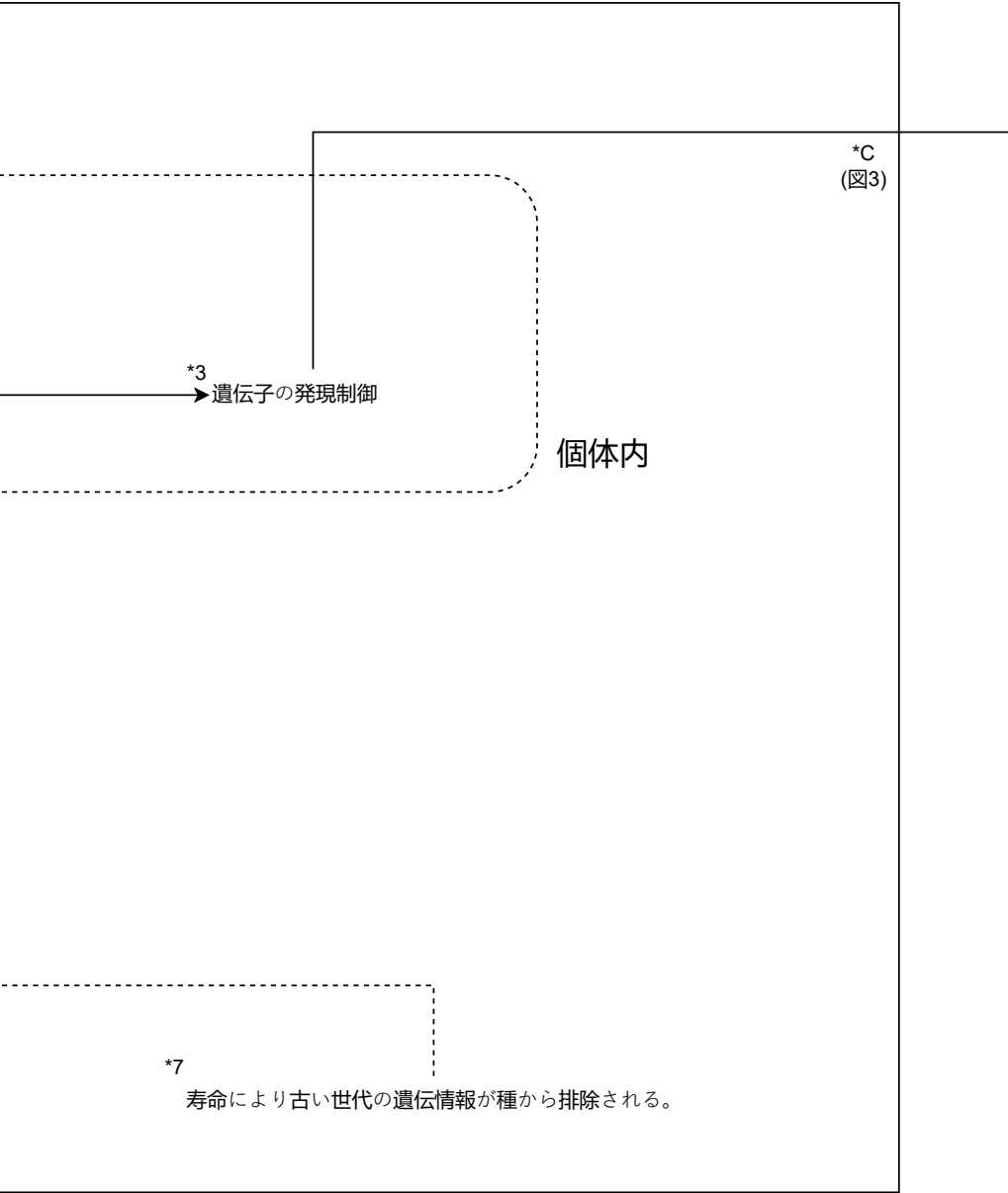
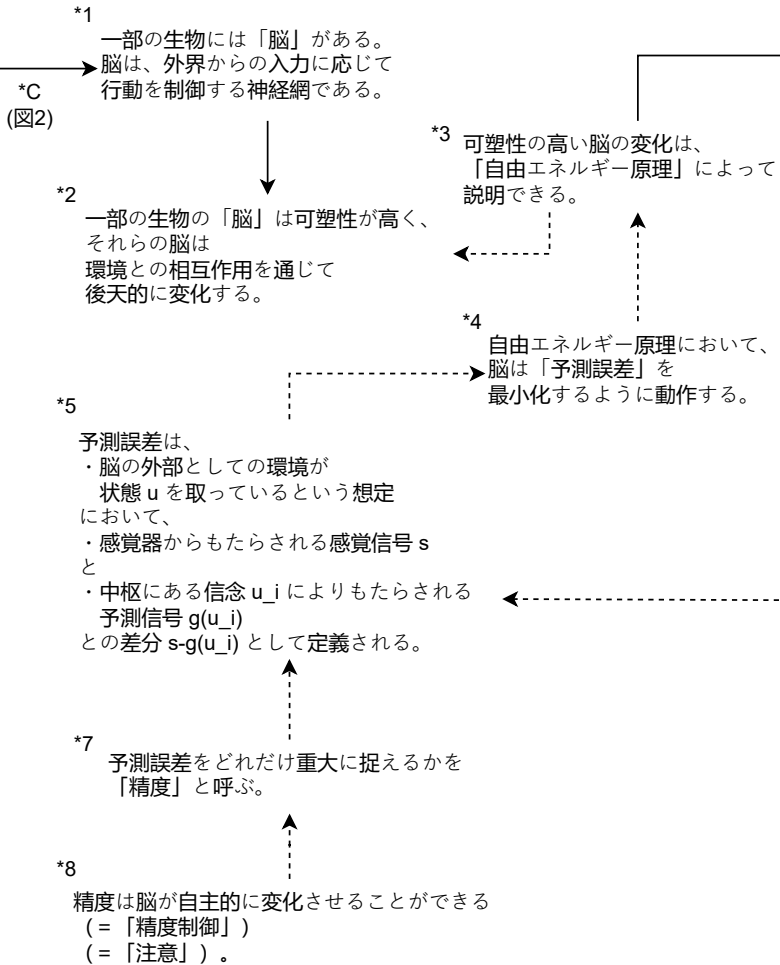


図3：脳と自由エネルギー原理



\*9 ダイバージェンスは、  
想定された状態  $u$  と感覚信号  $s$  に関する  
真の事後確率分布  $p(u|s)$  と  
想定された状態  $u$  に関する認識確率分布  $q(u)$  との  
(KL) ダイバージェンスにより定義される。

\*10 シャノンサプライズは、  
感覚信号  $s$  が観測される確率  $p(s)$  の  
対数で定義される。

\*11 最小化のプロセスは  
「変分ベイズ推論」により  
行われる。

\*6 予測誤差の最小化は、  
下記の式の「変分自由エネルギー」の最小化と等価である。  
(変分自由エネルギー) = (ダイバージェンス) + (シャノンサプライズ)

\*12 認識確率分布  $q(u)$  を更新することで  
ダイバージェンスの最小化を図る行為を  
「無意識的推定」という  
(= 「信念の更新」)  
(= 「学習」)。

\*H  
(結節点1)

\*13

運動野から  
「運動するとこのような筋感覚信号が観測されるはずだ」という  
「筋感覚の予測信号」が出力され、  
それが反射弓に伝わり筋収縮を起こす。  
反射弓では、  
「 $\alpha$ 運動ニューロン」が  
筋感覚の予測信号に合致するように筋肉を制御する。  
これが「運動」の仕組みである。

\*14

運動において、  
脳は認識確率分布  $q(u)$  は変動させないままで、  
想定された状態  $u$  における  
感覚信号  $s$  を再現させようとしている。  
感覚信号  $s$  が再現された場合、  
感覚信号  $s$  が観測される確率  $p(s)$  が向上する。  
これは感覚信号  $s$  を脳が  
「生成モデルとしての認識確率分布  $q(u)$  が  
正しいことを示す証拠」として利用していると解釈できる。

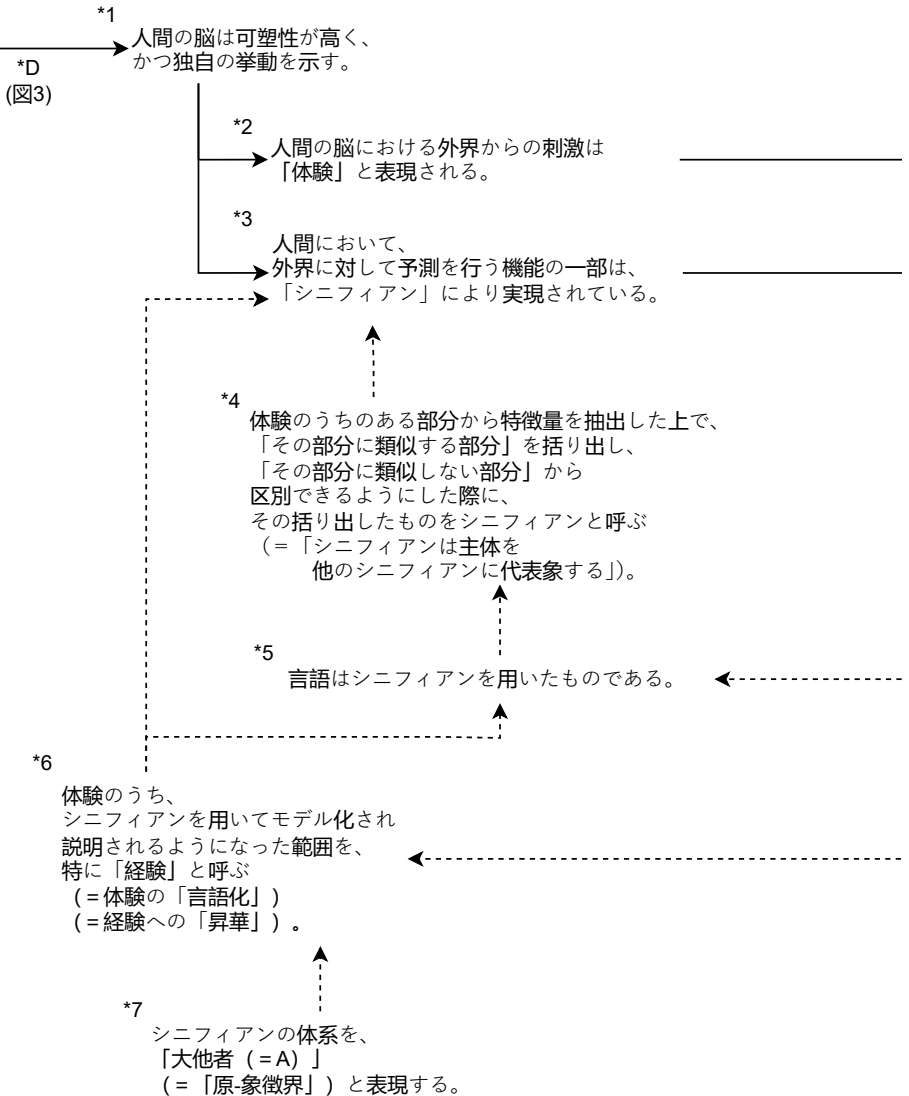
\*15

運動により脳は  
「自己証明」している  
(=「能動的推論」)。

\*16

運動により  $p(s)$  が向上すると、  
ダイバージェンスを減らすことができ、  
変分自由エネルギーを小さくすることができる。

図4：体験とシニフィアン





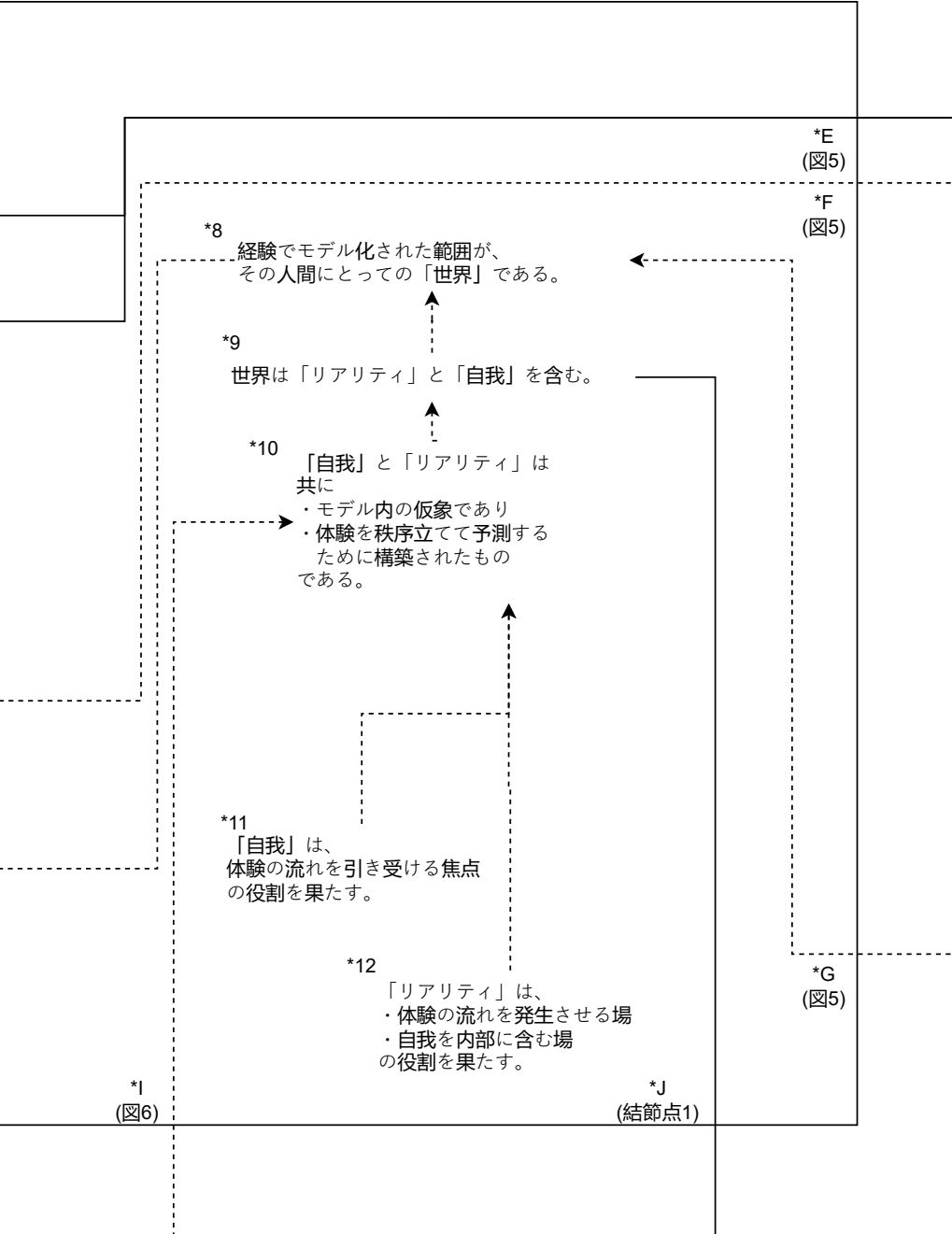


図5：対象aと欲動の主体

\*1 予測との誤差が大きい体験  
(= 言語化されていない体験)  
(= 経験に昇華されていない体験)  
(= 「内的体験」)  
(= 「トラウマ」)  
(= 「〈物〉」) は、  
その体験自体に中毒性があるため、  
脳において「反復」される  
(= 「反復強迫」)。

\*E  
(図4)

\*F  
(図4)

\*6 経験に昇華されていない体験は、  
ランダムで無秩序なものではなく、  
独自の「内包」を持つ。

\*7 シニフィアンの体系に参入する際に、  
経験に昇華されていない体験も  
同時に発生することになる  
(= 「原抑圧」)  
(= 「性関係の排除」)  
(= 「一般化排除」)  
(= 「疎外」)  
(= 「エディプス第一の時」)  
(= 「前エディプス期」)。

\*9 対象aが意識に現れること (= 「対象aの顕現」) は、  
「自身が採用しているシニフィアンの体系では  
体験を説明しきれない」ことを  
証明してしまうため、  
その体験を統御できない「不安」と、  
その不安を解消するための「防衛機制」を呼び起こす。

\*10

体験が経験へと昇華されていない状態は、  
「世界と体験との間に『葛藤』がある状態」  
だと表現できる。

\*G  
(図4)

\*2 予測との誤差が大きい体験を  
予測できるようにしようとする機制を  
「欲動」と呼ぶ。

\*4  
トラウマ的体験は、  
「享樂」をもたらす。

\*3 欲動の解消は、  
それが経験への昇華に依らない  
生理的なものであっても、  
満足をもたらす。

\*5  
予測誤差を体験したとき、  
概念に収まりきらない  
「存在」を人は感じる。

\*8 原抑圧により生じる、  
独自の内包を持った反復強迫する体験が、  
「対象a」 (= 「〈物〉の断片」) である。

\*12 主体による欲動に対する防衛は  
速やかに行われる。

\*11 対象aの顕現は、  
「大他者の非一貫性 (=  $\mathcal{A}$ )」  
(= 「象徴界の穴」) を露呈させる。

\*13 「葛藤」を解消する行為を  
行うものを  
「主体」と呼ぶ。

\*14 葛藤の解消と、  
主体の行為と、  
対象aの顕現に対する防衛とは、  
等価である。

\*K (結節点1)























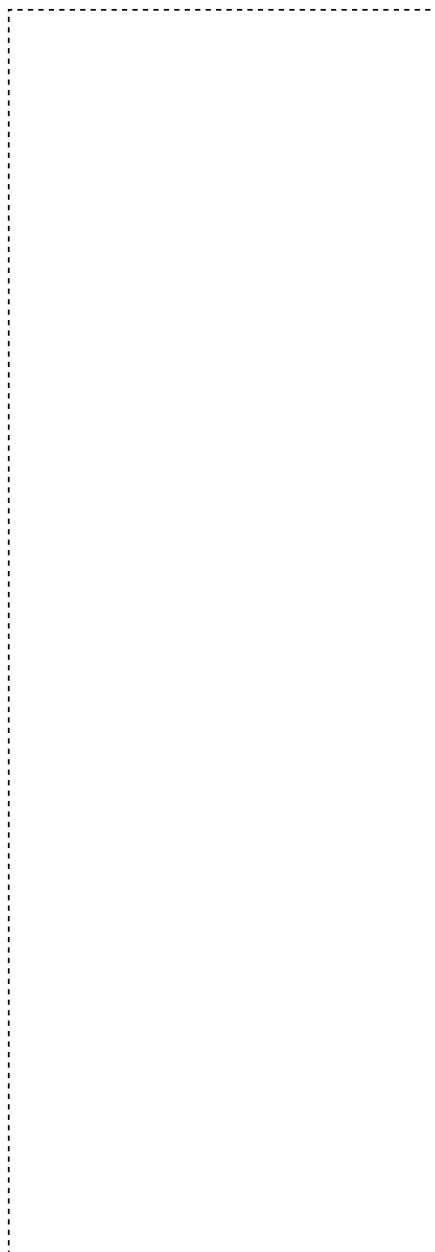




































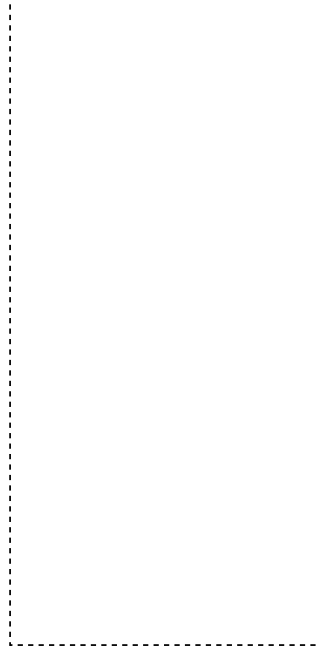




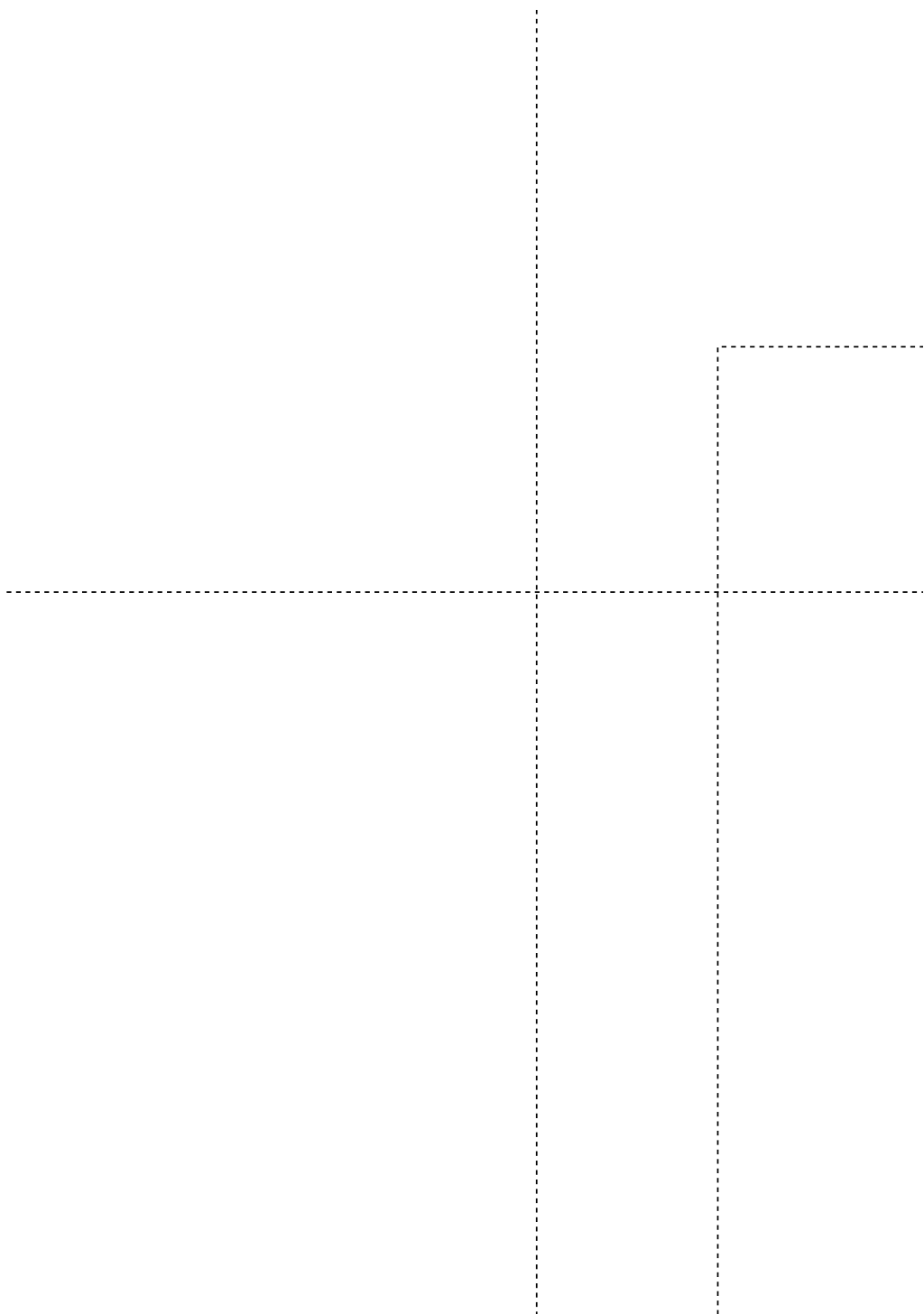








-----



結節点 1：人間の行為

\*J  
(図4)

\*α  
対象aの顕現に対する主体による防衛としての  
葛藤の解消は、  
自我とリアリティに対する修正を伴う。

\*F  
(図6)

\*K  
(図5)

\*β  
自由エネルギー原理における誤差の最小化と、  
主体による対象aの顕現の回避のための  
自我とリアリティに対する修正としての  
葛藤の解消は、等価である。

\*H  
(図3)

\*N  
(図8)



































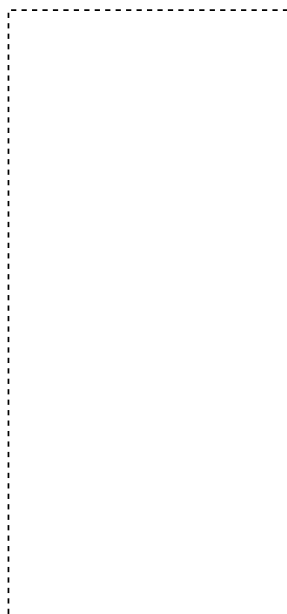
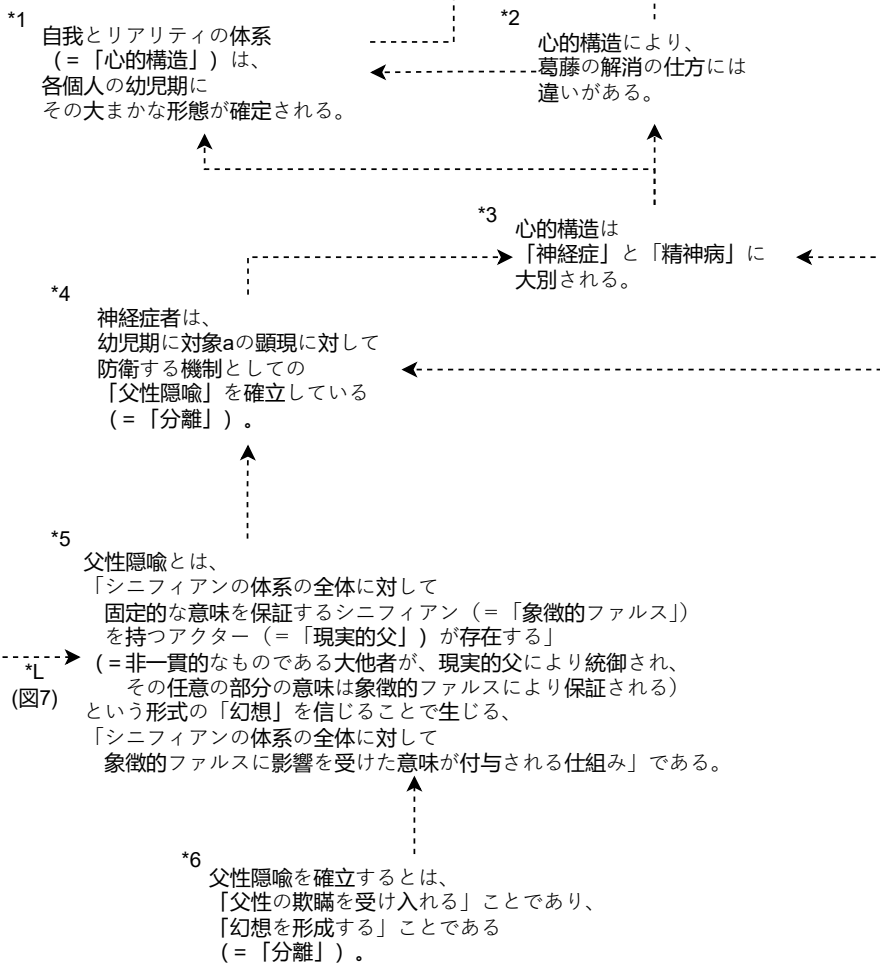


図6：神経症と精神病における葛藤の解消



\*8 精神病患者は、  
幼児期に対象aの顕現に対して  
防衛しなければならない状況を  
経験しておらず、  
そのため父性隠喩を確立してもいない。

\*7 神経症者は、  
父性隠喩を用いて対象aを隠喩化  
(=「抑圧」)することで、  
対象aの顕現に対して防衛する。

\*9 精神病患者は、  
対象aを意識から排除する  
(=「否認」)  
(=「知ろうとしない」)  
ことで、  
対象aの顕現に対して防衛する。

\*10  
修正の結果構築される  
自我とリアリティが、  
他の人間個体のそれからは  
整合性を保てない場合、  
そのような修正を行った人間個体は  
「病的」であるとされる。

\*11 神経症者の「症状」は、  
反復強迫する対象aとなった出来事 (S1) を、  
「隠喩」的もしくは「文字」的あるいは「音素」的  
つながりのある「言葉」を経由する (S1→S2) ことで、  
間接的に解消して満足するものである (=「象徴的加工」)。

\*12 精神病者の「症状」は、  
反復強迫する対象aとなった出来事 (S1) を、  
直接的・無媒介的に呼び起して解決することによって、  
解消して満足するものである。

\*13 直接的・無媒介的に  
呼び起された出来事は、  
「パラノイア」の場合では、  
「妄想形成 (S1→S2)」  
によって解決される。

\*14 直接的・無媒介的に  
呼び起された出来事は、  
「スキゾフレンニー」の場合では、  
シニフィアンの体系を用いずに  
そのまま身体で享樂を受け止める  
(=「S1の散乱状態」)。

.....

































図7：エディプス・コンプレックスの諸段階

\*L  
(図6)

\*1

幻想の形成は、下記のように行われる。

前象徴界への参入

\*2 まず

幼児期において予期されない体験としての対象aが顕現した際に、  
養育者がそれを繰り返し解決するという前段階がある。



\*3

その段階において、  
養育者は対象aの解消と結びつけて認識される。



\*4

養育者は様々な感覚的特徴を持ち、  
また様々な働きかけを幼児に対して繰り返し行う。



\*5

養育者の現前と養育者の様々な働きかけは、  
幼児の脳の中で  
対象aの解消（＝満足）と  
結びついたシニフィアンとして  
蓄積されていく。



\*6

そうして形成されるシニフィアンの体系が  
「大他者（＝A）（＝『（精神的）母』）」  
として前象徴界を形成する（＝「前エディプス期」）。

## エディプス第一の時 (= 「前エディプス期」 )

- \*7 しかし、大他者は以下の二点で対象aを十全に解消することはない。
- ・シニフィアンは体験との予測誤差をゼロにすることはない
  - ・養育者は現前と不在を繰り返し、幼児を不安にさせる
- 上記二点が「大他者の非一貫性 (=  $A$ )」を形成する (= 「不満」 )。

- \*8 そこで、幼児は  
「大他者を一貫したものにする要素  
(= 「ファルス」)」を探し求める。

- \*9 このとき、幼児にとってファルスは  
「自分が『それ』になることができるかもしれないもの」  
としての「想像的ファルス」として現れている。

## エディプス第二の時

\*10

エディプス第一の時において、養育者が  
「養育者の現前と不在を司る対象  
(= 「(精神的) 父」)」を  
シニフィアンとして幼児に示すとき、  
幼児は「父」を用いた幻想の構築を開始する。

\*11

父が父として幼児に作用するためには、  
父は幼児の前に現前するものから  
超越していなければならないため、  
父は幼児の前に現前してはならない。

\*12

まず、幼児は父を  
「大他者からファルスを『剥奪』した『想像的父』」  
として解釈するようになる。



### エディプス第三の時

\*13 しかし、このとき父は「ファルスを持つ者」としても現れている。  
その側面を受容するとき、幼児はファルスの存在を  
ファルスが現前しない状況のまま信じられるようになるので、  
幼児は**大他者の非一貫性を大他者の本質として**  
認められるようになる（＝大他者の「去勢」を受け入れる）  
（＝ $S(A)$ ）。

\*14

幼児に**大他者の去勢を**  
認めさせる者としての父を  
「**現実的父**」と呼ぶ。

\*15 父がファルスを持つと解釈されるとき、  
父は**超越的な「法」によって**  
大他者を統御する者と解釈されるようになる。

\*16 このような父を  
「**象徴的父**（＝『父の名』）」と呼ぶ。

\*17 父が持つ法の根拠としてのファルスは  
「**象徴的ファルス**」と呼ばれる。

\*18 これは、幼児が**自身の対象a**について  
「父および父の持つファルスを用いることで  
究極的には解決可能なものである」と  
解釈できるようになることと等価である。

\*20 現実的父に同一化し、  
自身も象徴的ファルスを父のように  
持とうとする主体を  
「（精神分析的）男」という。

\*21 象徴的ファルスに同一化し、  
ファルスを持つ現実的父に欲望されることで  
ファルスを間接的に持とうとする主体を  
「（精神分析的）女」という。

\*19 そこから、主体は**対象a**を解消するために  
自身もファルスを持つことを「欲望」するようになる  
（＝「欲望の主体」の誕生）。

\*M  
(図8)

.







































図8：神経症の主体における四つのディスクール

\*N  
(結節点1)

\*1  
\*M  
(図7) → 神経症的な欲望の主体が対象aを  
「(象徴的父により解決可能な) 問題」  
とすると、  
→ 主体はその問題に対して  
「(自身がそれになることはない) 根拠」と  
「(自身の手に入ることのない) 結論」が  
存在すると信じている。

\*2  
このように解釈をするとき、

- ・ a:  
対象a、転じて、予測誤差としての不確実性、  
加えて、そこにファルスが与えられるべきとされるもの
- ・ \$:  
欲望の主体。対象aの解消を試みてシニフィアンを操作する
- ・ S1:  
象徴的父、転じて、  
シニフィアンを連鎖させて構築する「言説」の根拠であり、  
根拠の選択の仕方により規定される  
「問いの枠組み (プロブレマティク)」
- ・ S2:  
父がもたらす法、転じて、言説の結論であり、  
問いの枠組みにおいて根拠に従属する諸命題  
の四つの要素を用いて、  
神経症者の思考や行動を表現する  
右記の「四つのディスクール」を描くことができる。

\*3  
四つのディススクールを構成する  
各位置には、  
右のような役割がある。

	動因	→	他者
↑	真理	//	生産物
			↓

- ・ 主体が当初  
同一化しているものが  
真理である
- ・ 真理には十全でないところがあり、  
それが動因を発生させる
- ・ 動因は他者に働きかけ、他者は生産物を算出する
- ・ 生産物は真理を十全にすべく生じたものだが、  
それは実現しない

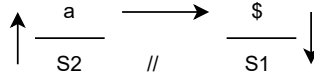
\*4

分離が始まる瞬間  
(=エディプス第二の時)に

対応するのが、  
右の「分析家のディスクール」である。

- ・主体は既存のシニフィアンの体系 (=S2) に  
同一化している
- ・シニフィアンの体系には非一貫性があり、  
予測誤差が対象aを生む
- ・対象aは主体 (=S) を作動させ、  
主体は革新的な視点 (=S1) を得る
- ・新たな視点は既存のシニフィアンの体系と調和せず (=S2//S1) 、  
シニフィアンの体系を組みかえはじめる

このディスクールは不安定であり、  
速やかに下記の「主人のディスクール」へと移行する。

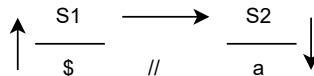


\*5

父性隠喩を確立する段階  
(=「エディプス第三の時」)に

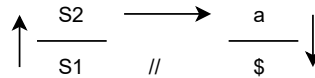
対応するのが、  
右の主人のディスクールである。

- ・主体 (=S) は新たな根拠となるシニフィアン (=S1) を生み出す
- ・新たな根拠に基づいて様々な命題が生み出されていく (=S1→S2)
- ・しかし、そうして構築された新たなシニフィアンの体系にも  
非一貫性 (=a) がある
- ・この非一貫性は、このディスクールで最初に欲望の主体が  
解消しようとしたものとは異なる新たな対象aである
- ・生み出された対象aと主体との間には断絶があるが (=S//a) 、  
主体はこの断絶が克服されうものなのだという  
幻想を信じる (=S◇a)



\*6

確立した父性隠喩について、  
現実的父に同一化し  
象徴的ファルスを持っている  
思いたい者は

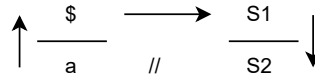


右の「大学人のディスクール」を好むようになる。

- ・主体(= \$)は言説の根拠(= S1)を所持する者に同一化している
- ・言説の根拠はそれ単独ではシニフィアンの体系を形成できず、自身に基づいた様々な命題を持っている(= S2/S1)
- ・様々な命題は、新たな対象aを  
既存の問いの枠組みを保持したまま解決しようとする(= S2 → a)
- ・だが、その試みは不徹底に終わり、  
新たな欲望の主体(= \$)を発生させる
- ・しかし、新たな欲望の主体に従って  
再びシニフィアンの体系を組みかえることは、  
現在の主体の同一化を放棄させることを意味するので、  
この新たな欲望の主体は抑圧される。

\*7

確立した父性隠喩について、  
象徴的ファルスに同一化し  
現実的父に欲望されることを  
欲望する者は



右の「ヒステリー者のディスクール」を好むようになる。

- ・主体は、  
対象aの位置に来るべき象徴的ファルスに同一化するために、  
ファルスに仮装する(= \$/a)
- ・仮装した主体は自身では対象aを解消できない
- ・仮装した主体は対象aを解消すべく、  
現実的父になりえそうな他者に働きかけて(= \$ → S1)  
様々な命題を吐き出させる(= \$ → S1/S2)
- ・しかし、いかなる命題も対象aそのものを  
根絶することはない(= a//S2)
- ・そのため、それらの命題の根拠(= S1)も失墜する



\*10

- エンジニアリングにおける主人のディスクールとは、
- ・新しく確立された視点や問題の枠組み (=S1) から、
  - ・さまざまな物事 (=S2) が規定され位置づけなおされていく (=S1→S2) 過程である。
  - ・主体 (= \$) は S1を確立すること (=S1/\$) で不確実性を解消しようとするが、その他方で新たな不確実性が発生する (=S2/a)。
  - ・この新たな不確実性には、その視点に立つ限り解消できない部分が含まれる (\$/a)。

\*11

- エンジニアリングにおける大学のディスクールとは、
- ・既に確立された視点や問題の枠組み (=S1) に根拠を持つ様々な命題 / 仕組み / 制度など (=S2/S1) を、
  - ・S1に変更を加えないまま拡張していくことで不確実性を解消していこうとする (=S2→a) 過程である。
  - ・その過程は不徹底に終わるため、残存する予測誤差が主体 (= \$) を発生させる (=a/\$) が、
  - ・このディスクールに立つ限り不確実性の解消は一応作動し続けているため、主体はS1に変更を取って加えようとはしなくなる (=S1// \$)。

\*12

- エンジニアリングにおけるヒステリー者のディスクールとは、
- ・自身が抱える予測誤差あるいは不確実性 (=a) の解決 (= \$/a) を、
  - ・既に確立された視点 / 問題の枠組み / 権威を持つ他者 (=S1) により達成しようとする試みであるが、
  - ・S1は有限の知 (=S2) しか生みだせず (=S1/S2)、それが自身の不確実性を解決することはない (=a//S2) ため、
  - ・結果はS1に対する失望に終わり、S1は手段としての信頼を失墜させる。

\*13

- エンジニアリングにおける分析家のディスクールとは、
- ・自身がそれまで依拠していた認識 / 仕組み / 制度など (=S2) に帰結するうまくいかなさ (=a/S2) が眼前に現れる (=a→ \$) ことで、
  - ・主体はそのままのうまくいかなさの解消を目的とした新たな視点や問題の枠組み (=S1) を生み出すように思考を強いられる (= \$/S1)。
  - ・新しく生み出されたS1は、それまで依拠されていたS2とは整合性を持たない (=S2//S1) ため、速やかに主体は主人のディスクールへと移って世界の再構築が行われる。





\*6

S1を失墜させることができない状況における主人のディスクール：

- ・ 確立されたS1から新たに規定されるS2が枯渇してしまっているため、新しい未既定の領域が眼前に現れない限り、(通常は)主人のディスクールが発生しなくなる。
- ・ ただし、分析家のディスクールを経て、新たな視点(=S1)に基づく世界解釈の可能性を発見した場合、そのS1に基づいた世界の再解釈が行われるようになることがある(それが端的に新奇な解釈であることもあるが、実際の社会のあり方にそぐわない妄想的な解釈であることもある)。

\*7

S1を失墜させることができない状況における大学のディスクール：

- ・ 大学のディスクールはS1の失墜を試みないため、この状況下において大学のディスクールは最も適合的なスタンスとなる。
- ・ ただし、社会に適合的であることと不満(=a)が解消されることは別である。
- ・ 他のディスクールに移ることを十分に学ばないまま身を持ち崩して大学のディスクールの中で評価されない周縁(=a)に追いやられた場合、大学のディスクールにおける自己滅却的な主体(=a/\$)(=S1//\$)は破滅的な選択肢を取るかもしれない。

\*8

S1を失墜させることができない状況におけるヒステリー者のディスクール：

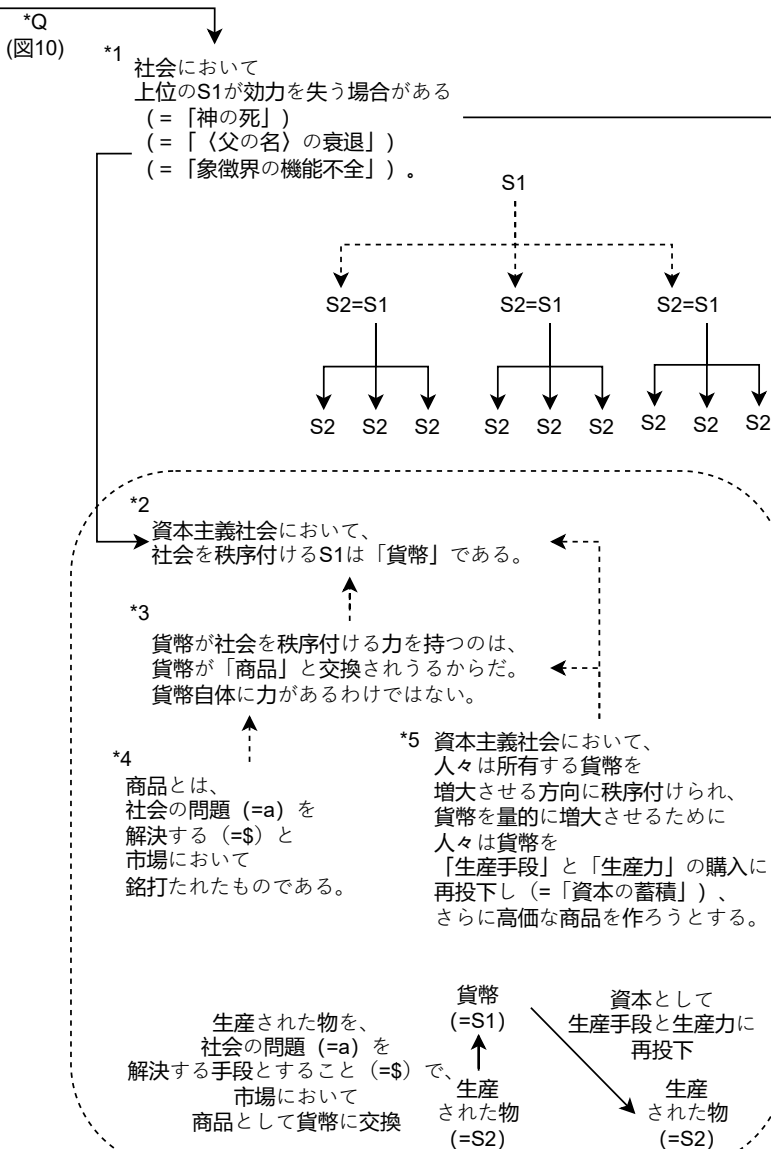
- ・ ヒステリー者のディスクールは、S1により提供されるS2が主体の不満(=\$/a)を満足させられないことを明らかにするが、それにも関わらずS1を失墜させることができないため、不満を抱えたままの状態に置かれる。
- ・ 不満を持っている者同士が集まることもあるが、ヒステリー者のディスクールは新たなS1を打ち立てるものでもないため、不満を持つ者の集団から秩序が生まれることもない。

\*9

S1を失墜させることができない状況における分析家のディスクール：

- ・ 分析家のディスクールでは、うまくいかなさ(=a)を抱えた当人にそのうまくいかなさを解消するS1を生み出させる(=a→\$/S1)ことで、当人なりの新しい世界解釈を生み出す結果につながる場合がありうる(社会のS1を失墜させることができない状況下では、社会のあり方を変えること自体は困難なままである)。

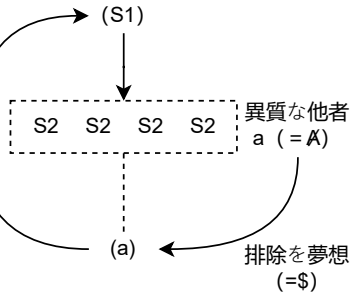
図 1 1： エンジニアリングが持つダイナミズムからの疎外の結果 2（不安と暴力）



\*6

人は上位のS1が衰退すると、  
自身の理解を超えた行動パターンを取る  
異質な他者の行動 (=a) が、  
自身に危害を与えずに社会的に  
統御されるとは信じられなくなり、  
不安 (=A) になる。

本来の  
状態の  
回復を  
夢想  
(= \$)



\*7

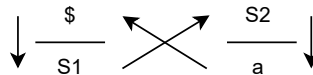
この不安において、異質な他者は  
「社会が本来の状態になることを妨害している者」  
として理解されるようになり、  
その理解から逆転して  
「異質な他者を排除すれば  
社会の本来の状態を回復させることができる」  
という幻想が生じる (=「レイシズム」)。

\*8

この幻想は、  
あたかも安寧な社会が実が可能であるかのように感じさせるものであるため、  
父性隠喩の確立と同じ効果を主体にもたすがゆえに、  
主体に強い満足感を与えることができる。

\*9

資本主義における人々の行動は、  
「資本主義のディスクール (右図)」  
によって記述できる。



\*10

資本主義において、  
人々は「労働者」あるいは「資本家」として貨幣や資本の増大を図る一方で、  
「消費者」としては、自身が抱える不満 (=a) を  
商品の購入 (= \$) により速やかに解消できる状況に置かれるため、  
神経症的な幻想や欲望を構築する際に現れたような  
自身の不満足の原因について思考する契機を奪われることになる。